

小学校教員養成課程における「聴取力」に着目した 英語科と音楽科との連携 —“英語の歌”を用いて—

吉田雅子・石塚真子

2023年1月16日受付 2023年2月10日受理

Collaboration between English Methodology Class and Music Methodology Class Focusing on “Listening Ability” in Elementary School Teacher Training Course —Using English Songs—

Miyako Yoshida, Masako Ishizuka

キーワード：聴取力, 教員養成, 英語科, 音楽科, 英語の歌

責任著者：吉田雅子（大阪体育大学教育学部 myoshida@ouhs.ac.jp）

I. 本研究の背景と目的

2020年度より順次、改定された学習指導要領が実施されることとなり、小学校においてもこれまで高学年を対象に行われてきた外国語活動は中学年へ移行し、代わって高学年では外国語科が教科として行われることとなった。しかし、英会話学校イーオンが行なった「小学校の英語教育に関する教員意識調査」（2019）によれば、高学年において英語を「教科」として教えることについて「あまり自信がない」「不安の方が大きい」という回答は48%を占め、「自信がある」「やや自信がある」

と答えた教員は29%を上回る結果となった。また、中学年で「英語活動」を行うことについて「自信がある」「やや自信がある」と回答した教員は46%であったが、「あまり自信がない」「自信がない」との回答は50%であったことから、現場の教員の多くが英語の授業を行うことに不安を感じている。

大阪体育大学教育学部の学生には英語に対する苦手意識を持っている者が多く、英語のリスニングが苦手だという声はよく聞かれる。例年、教育学部の学生のうち半数程度が小学校教員になることを目指しており、教育実習

や採用試験の準備段階で、英語学習を慌ててはじめる学生も多い。このことから、学生によって英語力に幅があるとはいえ、大学における教員養成課程において、小学校教員を志望している学生は少しでも自信を持って英語活動や英語科の授業に取り組むことができる実践力までを見越した英語力を身に付けることが喫緊の課題だと言えるだろう。授業をする上で必要とされるだけの英語力を伸ばすためには、教養科目やコミュニケーション科目だけでなく、小学校教員養成コースにおいて必修科目となっている教科教育法（英語）などの教職科目でも扱う必要がある。そこで、英語に対する親しみを持たせる身近な教材として英語の歌を活用した。英語の歌は、英語科だけでなく、音楽科でも活用されていることから、教科教育法（音楽）と連携を取り、小学校教員養成における英語科と音楽科の教科横断的視点に立った指導力の育成を視野に入れたパイロット研究として「聴取力」に着目した授業実践を行うこととした。そのため、本稿では、教科教育法（英語）と教科教育法（音楽）それぞれの授業で共通した英語の歌を用い、英語や音楽に興味を持たせることを前提とした実践について報告することとする。

（用語について）

①「ドレミの歌」について

楽曲そのものを示すときは「ドレミの歌」、日本語歌詞での歌唱・鑑賞を示す場合は「ド

レミの歌（日本語歌詞）」、英語歌詞での歌唱・鑑賞を示す場合は「ドレミの歌（英語歌詞）」を用いる。

②「学習材」について

「Ⅳ、外国語科と連携した音楽科の授業実践について」においては、教師の立場と学習者の立場の両面から捉えた学びの材料として、「学習材」を用いている。

③「きく」という用語については、外国語科では「聞く」を、音楽科では「聴く」を用いる。

Ⅱ. 英語における「聴取力」と英語の歌

1. 英語による「聴取力」

英語における「聴取力」とは、いわゆる「話されている内容を聞き取る力」と考えられがちであるが、実際には、英語の「語」の音声を聞き取り、「語」を形成している音素を分析する力が無くては、話されている言葉をたどり内容を推測し理解することはできない。一般に、話されている言葉を理解するためには、①英語の音声を分析する力②語彙の知識③文法の知識④内容を理解するための一般的な知識が必要であり、特に英語の音声は、音素が連なることで音節となり、強勢が生まれ、単語や句、文のイントネーションやリズムを作り出すという特徴があり、日本語の拍(mora)とは異なっているため、英語が苦手だと言う人の多くは、このような英語の音声の特徴を

捉えることができない。英語を聞きとる力を伸ばすためには、第一に、英語の音声に慣れ、これらの基礎知識を習得していく必要がある。そのため、この実践においては、英語における「聴取力」を英語の音声の特徴を捉える力と定義しておく。

2. 小学校「外国語活動」「外国語科」で習得すべき「聴取力」

小学校において習得し得る「聴取力」とは、英語を聞き取る上で必須となる英語の音声の気づきが必須となる。2020年度施行の小学校学習指導要領では、中学年の外国語活動において身につけるべき資質・能力として「コミュニケーションを図る素地を育成すること」¹⁾を目標としているが、英語の音声を、コミュニケーションを図る素地を育成するための「知識及び技能」として位置付けており、授業内の活動においては「日本語と外国語との音声の違いなどに気づくことだけでなく、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにすること」²⁾が求められている。そのため、中学年の外国語活動の授業においては、表現を覚えたり文構造など抽象的な概念について理解することよりも、英語の音声、英語特有のリズムやイントネーションに親しませることを重要としており、それらの特徴を体得するために実際に英語で歌ったりチャンツをしたりすることを例に挙げていることから、児童の発達に応じて適切な英語の歌を利用してい

くことが、英語の音声を聞く力を身につける上で重要だと考えられる。

また、高学年の「外国語科」においては、中学年と同様に英語の音声を「知識及び技能」に関わるものとして捉えているが、「外国語活動」で習得した知識や技能をもとにして英語の音声を「聞くこと」だけに留まらず、「読むこと」にも結び付けている。そのため、中学年では、児童それぞれの能力に配慮しながら、/t/や/s/などといった英語の発音から文字を認識することが求められ、高学年では文字の読み方に親しみ、興味・関心が高められるような歌やチャンツなどの活用やアルファベットには文字の名称と音がある気づきだけでなく、単語を使って音声に慣れ親しませる活動も求められていることから、英語の音声については、時間をかけて丁寧に教えることが必要であると言えるだろう。

3. 小学校英語授業における英語の歌の扱いについて

英語授業における英語曲の導入には、授業の雰囲気作りや英語学習への動機付けという目的だけでなく、異文化理解へのとびらという側面がある。これまでも、中学校や高校の英語授業では、ウォーミングアップの活動としてだけでなく、歌を歌うことを通して学習者が英語特有の発音やプロソディ（ピッチ・ストレス・イントネーション）を意識できるよう、発音指導の一環として用いたり、歌詞

に見られる英語独特の表現から曲の文化背景について触れたりする教員もいた。このように語学教育において音楽を用いることは、学習者の不安を緩和し、学習意欲を向上させる

上で効果がある (Krashen, 1982) と言われており、学習者の年齢に関係なく、英語授業で英語の歌を活用することは有効である。

表1 小学校英語教科書に掲載されている英語の歌

東京書籍 NEW HORIZON Elementary English Course		教育出版 One World Smiles	
5年	取扱なし	5年	It's a Small World
6年	Take me Home, Country Roads We Are the World	6年	Smile
光村図書 Here We Go!		学校図書 JUNIOR TOTAL ENGLISH	
5年	This Is the Way Pease Porridge Hot I Love the Mountains On Top of Spaghetti It's a Small World Everyone Is Special	5年	The Bear Went over the Mountain Rain, Rain, Go Away A Sailor Went to Sea Pease Porridge Hot Eentsy, Weentsy, Spider One, Two, Three, Four, Five One Elephant Went Out to Play This Little Pig Went to Market Old MacDonald Had a Farm
6年	How Do You Do? Do-Re-Mi Take Me Out to the Ball Game A Sailor Went to Sea Humpty Dumpty Me on the Map Bring Happiness to the World Over the Rainbow I Think You're Wonderful	6年	I Love the Mountains If You're Happy London Bridge Row, Row, Row Your Boat Mary Had a Little Lamb Down by the Bay The Farmer in the Dell Once an Australian Went Yodeling This Old Man She'll be Coming 'Round the Mountain
開隆堂 Junior Sunshine			
5年	Hello Song ABC Song Twelve Month Sunday, Monday, Tuesday Twenty Steps Hundred Song		
6年	Twinkle, Twinkle, Little Star		

小学校の英語授業においては、英語の歌が英語科教科書にも多く掲載されていることから、児童の英語に対する興味・関心の育成や授業の雰囲気づくりだけでなく、英語の音声に慣れ親しむ上で大いに活用されるべきであろう。英語の歌が掲載されている教科書が多い中で、New Horizon Elementary English Course 5(5年用)や啓林館Blue Sky Elementaryのように一切英語の歌が扱われていない教科書も存在した。掲載されている曲には、Nursery Rhymeと呼ばれる英語圏で多くの子どもが歌うものが多く見られ、外国語として英語を学ぶ者にとっては英語の音声の特徴に慣れ親しむだけでなく、言葉の特徴や歌遊びなどの生活文化について学ぶこともできる。また、アメリカのフォーク・ミュージックであるTake Me Home, Country Roadsやアメリカの野球スタジアムで歌われるTake Me Out to the Ball Game, We Are the Worldのような認知度の高い曲も掲載されているが、これらの曲は比較的曲調がゆっくりであるため、小学校高学年であってもあまり難易度は高すぎず、音と音が繋がるリンキングについても気づきやすいため、英語の音声の特徴を意識しつつ歌うことができると考えられる。しかしながら、英語の歌詞には、押韻を重視することで起こる通常とは異なるリズムや語順などを含むものがあることにも留意する必要がある。

Ⅲ. 教科教育法(英語)における授業実践について

1. 学生の現状

英語の歌を教材として活用するにあたり、学生たちの音楽を聴く習慣や英語に対する興味について知るために、令和4年度教科教育法(英語)を受講した学生68名に対してたずねた。音楽を「毎日聞く」という学生が8割以上を占め、聞く時間に関しても1日に1~2時間聞くと答えた学生が全体の7割を占めていた。概ね、学生にとって音楽を聞くことに対して違和感はなく、一定の習慣化がされていることが認められた。しかしながら、よく聞く音楽の使用言語については日本語が9割を超えている一方で、英語と答えた学生は4名(6%)のみということから、英語に対する興味が非常に低く、日頃から英語の歌を聞く習慣もほとんどないという実情が浮き彫りとなった。

また、学生たちは小学校で『外国語活動』の授業を受けた経験のある年代であるが、これまでの英語の授業でどのような英語の歌を聴いたことがあるかをたずねたところ、30人が小学校で英語の歌が取り入れられていたことを記憶していた。実際に取り入れられた曲は、Hello song, ドレミの歌, Head Shoulders Knees and Toes, ABC song, 曜日の歌, 月の歌といった英語学習の初期によく用いられる曲があった一方で、ビートルズやQueenのDon't Stop Me Nowといった小学生には少し

難しいと思われる曲も挙がっていた。しかし、複数人数から挙げられた曲は、エーデルワイス、キラキラ星やABCソングであったことから、英語に慣れ親しませるために小学校音楽教科書に掲載されている曲を活用すれば学生

たちにとっても負担が軽減されるため、ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」の代表曲でもある「ドレミの歌」「エーデルワイス」を用いることは適切であると考えられる。

表2 音楽を聞く頻度

	7日	6日	5日	4日	3日	2日
人数 (%)	57人 (84%)	2人 (3%)	5人 (7%)	2人 (1%)	1人 (1%)	1人 (1%)

表3 一日に音楽を聞く時間

	7時間	6時間	5時間	4時間	3時間	2時間	1時間	30分	20分
人数	1(1%)	1(1%)	2(3%)	4(6%)	6(9%)	25(37%)	23(34%)	4(6%)	1(1%)

表4 音楽の使用言語

日本語	62人(91.2%)
英語	4人(5.9%)
その他の言語	2人(2.9%)

2. 教科教育法（英語）における発音指導

本来、英語の音声や子ども向けの歌である Nursery Rhymes やマザーグースなどの児童文学は、英語科概論で英語に関する背景的な知識として扱われるものである。しかし、これまでの学生が受講した英語科概論は集中講義という形で他の教員が担当していたことや、教科教育法（英語）の授業では、外国語活動や外国語科の授業指導力を学生に体得させるだけでなく、授業向上のための基礎知識を継続的に触れさせておくことも必要であると考え、英語の音声に少しでも興味や関心を持たせられるよう授業の冒頭で英語の歌の聞き取りと発音の確認を主体においた活動を行った。また、連携した音楽科では、「ドレミの歌」「エーデルワイス」の曲の背景についても教材研究の一つとして扱われることや、英語科と音楽科ではその教科の特性からも異なった視点を持ってそれぞれの曲を扱うことが想定されたため、英語の音素やプロソディ、語間がつながって聞こえるリンキングや綴りにあるはずの音が消えたように聞こえるリダクションに焦点を絞った発音指導を行った。

まず、英語の歌がどのように歌われているかについて関心を持たせるため、学生に自分が聞こえた発音を使い、そのまま歌わせることにした。「エーデルワイス（英語歌詞）」を何度も聴かせ、自分が聞こえた発音のまま歌詞を書き取らせたのであるが、この方法は、

ジャズシンガーである綾戸智恵がNHK「課外授業 ようこそ先輩」の中で、自身の母校に在籍する小学生に‘Let It Be’を歌わせるため、慣れない英語の発音に挑戦する上で英語の発音記号を辿るのではなく、自分が聞こえたように歌詞をカタカナで書き留めさせていたことから着想を得た。

エーデルワイス Edelweiss は、使用した曲のタイトルではあるが、映画「サウンド・オブ・ミュージック」の舞台となるスイスアルプスに自生する花の名前で、オーストリアの国花である。登場人物たちが映画の最後で家族の安全を確保するためにアルプスの山を歩いて越えるということからも、この映画にとっては非常に重要な曲である。しかしながら、タイトルとして表記されている「エーデルワイス」はカタカナ読みであり、実際には /éɪdlvɑ:ɪs/、あるいは /éɪdlwɑ:ɪs/ と発音する。今回聞かせたものは、共に原曲であり、この曲の中では /éɪdlvɑ:ɪs/ と発音されるが、/éɪdlwɑ:ɪs/ と考えられる発音をカタカナで書いていることが認められた学生は76名中39名のみであった。このことは、/v/の発音が日本語にないことも影響していることも想定されるが、残りの生徒が、英語で書かれた歌詞や既に知っていたカタカナ読みの曲名に影響されたとも考えられる。

次に、「ドレミの歌（英語歌詞）」では、リスニングで特に日本人が苦手とするリンキングやリダクション、強勢（ストレス）と思わ

れる場所に印をつけさせることを事前課題とした。授業では、自分が課題としてやってきたものを確認し、次のステップとして他の学生と共有させ、自分が気づいていない音声の特徴がないかを確認させた。その上で、もう一度曲を聴きながら確認を行わせた。その際、必要であれば訂正をしても良いという指示を与えたが、リンキングやリダクションの印をつけること自体に困っている学生もいたため、これまでに適切な発音指導を受けたことがない学生がいる可能性も考え、今後の実践では、もう少し丁寧にリンキングやリダクションについても触れておくことが必要だと言えるだろう。

限られた時間ではあったが、そのようなそれぞれの曲にある音声の特徴を捉えさせた上で、2曲とも歌詞の発音の練習をし、実際にプロソディに注意しながら歌を歌った。比較的英語が苦手だと言っていた学生でも、リズムに合わせて熱心に歌っていた。ただし、曲のテンポとしては「エーデルワイス（英語歌詞）」は、歌詞が英語であっても比較的緩やかで歌いやすく、「ドレミの歌（英語歌詞）」はテンポが少し速いことや歌詞にある単語にリンキングやリダクションが多くあったため、曲のスピードに追いつかない学生もいた。

3. 発音指導についての考察

授業後、「ドレミの歌（英語歌詞）」「エーデルワイス（英語歌詞）」を歌う上で難しかった

と感じたものを学生にたずねた。30名がリズムを挙げ、40名が発音を挙げていた。何も難しなかったと回答した学生もいたが、学生からの感想には、「ゆっくり言うならできるが、早く且つリズムに乗って言うのが難しかった。（口や舌が回らない）」「単語がぎゅっと詰まったところの素早い発音とリズム」「単語と単語のつなぎ目を意識しすぎるとリズムが狂うのでリズムが難しかったです。あとシンプルに自分のリズム感の問題もありました。」「繋ぎ合わせて読む単語があったのでそれを組みあわせてリズムを取るのが少し難しかった。」のように、英語特有のリズムとそれに伴うリンキングの難しさについて言及しているものや、「日本語では表せられない発音が出てくる場所。」「日本人に慣れ親しんだ発音ではなく、一つ一つのアルファベットの発音に基づいた発音なのが、聞き馴染みがないから難しかった。」といった日本語の拍ではなく、英語特有の音素や発音の難しさについて触れている学生もいた。

また、「前置詞をはっきり言わないところが難しいと思いました。聞いている方も聞き取りにくいので前置詞は難しいと思いました。だから、発音する時に少し苦戦しました。」のように、英語のリズムを刻む際に起こる「弱勢」と呼ばれるものに気づいたという学生や、「ももとの日本語で歌う歌に合わせたリズムで日本語よりも長い単語の歌詞を歌うのが難しかった。ですが、うまく歌えるととても気

持ちよかったです。」と発音が難しいと感じたにもかかわらず、繰り返し練習することでうまく歌えるようになったという達成感をしめすコメントもあった。

英語の歌を歌う上で難しいと思ったものを発音、あるいはリズムのどちらかを挙げた学生もいたが、実際には発音とリズムの両方を挙げたものもいた。また、単語と回答した学生もおり、両曲とも基本的な単語しか使っていないことから、英語学習の早い時期に英語への興味を失っていたことがうかがえる。しかしながら、筆者が特に焦点をあてていたことに気づき、理解していた学生がいたことがわかったことで、大学の授業においても継続的な発音指導を行うことの意義を改めて感じられる結果となった。

4. この実践から見えた課題と今後の展望について

今回、ディクテーションの際に聞こえた発音の通りにカタカナで表す活動をさせたが、「カタカナでは英語の発音を表せない」というコメントがあった。本来、どんな言葉であってもその音を示す発音記号があり、カタカナでは日本語に基づいた発音を示すこととなるため、その扱いには限界がある。他のコメントにあったように、日本語で認知している曲を英語の歌詞で歌うことは難しい。たとえ、英語に基づいた発音を示す発音記号を使ったとしても、学生が正しく使えるかどうかにつ

いては、発音を学ぶ方法を含めて今後検証が必要であると言えるだろう。

また、英語でうまく歌えるようになるには、繰り返し練習する必要がある。今回利用した「ドレミの歌」や「エーデルワイス」だけでなく、さらに幅広い英語の歌を扱うことで指導可能となる英語の歌が増え、「飽きずに」発音練習に励むことも可能となる。そのためには、教科教育法（英語）の授業だけでは時間的に限界があり、英語科概論と教科教育法（英語）の授業をうまく関連させることで、継続的な発音指導と授業実践力の向上を目指すことができると思う。

小学校に英語科専科教員を導入する動きがあるが、全ての学校に専科教員を配置するまでに今しばらく時間が必要となろう。また、専科教員は、中学校・高等学校の英語科教員免許を持っていることが多いと思われ、小学校の教員でそのような免許を持っている教員はほんの一部であろう。裏を返せば、大学時代に中学校・高等学校免許に必要な「音声学」の授業を受けた教員は少ないということであり、中学校・高等学校教員養成課程のない大学における小学校教員養成課程における「音声学」科目に代わる「発音指導」についての在り方について考える余地はあると言える。

Ⅳ. 外国語科と連携した音楽科の授業実践について

1. 外国語科との連携への経緯

本学教育学部では小学校教諭一種免許を取得する際の教科に関する科目として「音楽科概論」(2年次後期)「教科教育法(音楽)」(3年次前期)を必修科目としている。これらの授業科目は、小学校の学級担任として音楽の授業を行うことのできる人材の育成を目的としており、音楽科教育の動向はもちろんのこと、受講生自身の音楽経験や嗜好を踏まえつつ、学習内容や学習方法を例年検討しながら現在に至っている。受講生たちにとっては、教科としての音楽に改めて向き合う機会ともいえるため、日常生活の中で各々が接している音楽を音楽科の学びへといかにつなげるか、そのヒントを提示することが本科目の主眼であると筆者は考える。

まず、小学校学習指導要領を参照しつつ、音楽科教育の最新動向を確認する。第9次小学校学習指導要領における音楽科の目標には、「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」の育成を目指すことが示されている。また、この資質・能力の育成には、学習者が「音楽的な見方・考え方」を働かせて学習にとり組めるようにする必要があると述べられている³⁾。「音楽的な見方・考え方」とは、音楽科を学ぶ本質的な意義の中核をなすもので、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働

きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連づけること」⁴⁾であると考えられている。

今回の改訂では、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連づけながら学習するということが強調されたといえる。このことから、当事者性を育むことに主眼を置いた多様な教育内容を検討する必要がある、それに対応した柔軟な学習方法の導入が求められていることがわかる。したがって、教員養成の場においては、学生自身(指導者)の音楽教育経験の幅を広げ、それを児童(学習者)の音楽学習経験へといかにつなげるかという視点が必要であるといえよう。

次に、「音楽科概論」「教科教育法(音楽)」を履修する学生の近年の傾向について述べる。筆者が特に感じるのは、学生たちの持つ音楽的嗜好と授業でとり扱う学習材(楽曲)とのずれが、年々、大きくなっている点である。例えば、カラオケ好きな学生は多いが、カラオケでは学校で習った楽曲は歌わないし、鍵盤ハーモニカやリコーダーを持って行く学生もいない。学生の90%以上が毎日、J-POP、K-POP、ヒップホップ等の音楽を聴いている。つまり、学校で学習する音楽の内容と日常での音楽の楽しみとは全く別物になっているといえる⁽¹⁾。また、小・中学校の時の音楽については、音楽の授業が嫌いだった理由として「歌唱の試験等、人前で演奏するのが恥ずかしかったから」を挙げる学生が最も多い。

一方、音楽が好きだった理由には、「歌唱や楽器の演奏が楽しかったから」が多く、表現活動（実技）に対するモチベーションの個人差が大きいといえる⁽²⁾。そのため筆者が担当する授業科目の表現活動においては、彼らが比較的嫌悪感をいだかないようリズムを中心とした打楽器の活用や、自分たちの好きな音楽を紹介する活動などを導入として位置づけながら内容を組み立てている。

ここ数年のコロナ禍のもとでは、歌唱やリコーダー等の活動が制限されていたこともあり、鑑賞活動の時間数を増やさざるを得なかった。鑑賞学習においては、今（2014, 49）が、「日本の鑑賞授業は、教師が作品に対する解説を行い、その後CDを鑑賞、子供たちが鑑賞した楽曲作品に対して感想を記述するという学習パターンがこれまで往々にして行われてきた。しかしながら、このような学習は、子どもたちが受け身になりがちであり、活発な学習活動へと展開しづらいという課題が見受けられる。」⁽⁵⁾と指摘するように、鑑賞に特化した固定的な学習方法を維持しているようでは、指導者自身の音楽教育経験の幅を広げることができない。現状を打開するためには、学習材に応じた実践的・体験的な学習方法を大胆に取り入れることが必要ではないか。例えば、各々の音楽に内在する社会的・歴史的な文脈をふまえて、他教科と連動した学習モデルを構成することは十分に考えられる。また、カラオケのように楽譜を用いず「音を耳

で聴き取る」学習方法を取り入れることなども想定される。学習材とそれに対応する学習方法をセットにした、従来の方法にとらわれない新たな学習モデルを提示することが必要であると筆者は考えた。そこから着想したが、「英語の歌」の学習を通じた聴取力の育成や、英語/日本語の歌詞と歌唱法の相違を活かした音楽文化の受容力の醸造を目指す新たな学習モデルの開発であり、その基盤としての音楽科と外国語科との連携である。

2. 「教科教育法（音楽）」の授業について

「教科教育法（音楽）」（3年次）では、表現領域（歌唱、器楽、音楽づくり）、鑑賞領域の授業づくりに関する講義と、歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞分野の模擬授業等を行っている。特に、模擬授業は、実践力とともに学習材研究の方法を身につけることを目的としている。模擬授業のテーマは、2領域4分野から歌唱3、鑑賞1、器楽2、音楽づくり1、鑑賞1、日本の伝統音楽1、諸民族の音楽1の9つのテーマにとり組んでいる。「教科教育法（音楽）」は、約30名ずつ3つのクラスに分かれて行っているため、1クラス9グループ、3クラスで27グループが模擬授業を行うことになる。模擬授業は、とり組む学習材の研究資料・指導案を作成し授業実践を行う（学習材の研究や指導案、模擬授業の準備等は、授業時間外に補講を行っている）。

本研究で、外国語科と連携した学習材は、

小学校音楽科の教科用図書「音楽のおくりもの」(教育出版)で1年生、3年生、4年生でとり上げられている、ミュージカル「サウンドオブミュージック」の1曲である「ドレミの歌」である⁶⁾。この楽曲は、まず1年生で、「どれみとなかよし」という題材での鑑賞分野の学習材として、「どれみにあわせてからだをうごかそう」という目当てでとり上げられ、体の動き(ドレミの体操)を通して、階名、音高、音階等に親しむための学習を行う。つぎに3年生では、「楽ふとドレミ」という題材の中で「ドレミで楽しく歌う」ことをねらいとして、ハ長調の音階で表現する活動に興味を持ち、二部合唱をも楽しむことができる歌唱分野の学習材としてとり上げられている。さらに4年生では、「歌声をひびかせて」という題材の中で、鑑賞分野の学習材として「いろいろな歌の表げんを楽しもう」というねらいで、様々な歌声の表現やミュージカルの楽しさを味わう学習を行う。このように学年を跨いで系統的に学習していく楽曲であり、「ドレミの歌」という楽曲について様々な角度からとり組み原曲の鑑賞へと展開していく。つまり、音楽科における学習材研究について具体的に理解できる楽曲といえる。

前年度までは、学習材研究の視点から、「ドレミの歌」の日本語歌詞での歌唱を中心とした歌唱分野としての模擬授業を行った後、ミュージカル「サウンドオブミュージック」の鑑賞分野の模擬授業を行った。

歌唱分野(表現を含む):

「どれみのうた」(1年生)

*ドレミ体操を活用して、音の高さと階名を覚える場面の指導を行う。

鑑賞分野(歌唱を含む):

ミュージカル「サウンドオブミュージック」
(4年生)

*「ドレミの歌(日本語歌詞)」,または「エーデルワイス(日本語歌詞)」の歌唱を含める。

歌唱分野に身体活動を鑑賞分野に歌唱活動を含めたのは、学生が当事者として音楽文化を理解するためには、聴覚、視覚、身体感覚等を通じた表現活動を行うことがもっとも有効であると考えたからである。このような意図で行った模擬授業とその後の研究討議での議論において、音楽科の学習材研究の方法を理解するというについては一定の成果があったといえる。

3. “聴取力” “音楽文化”に焦点を当てた鑑賞の学習について

この学習モデルを、音楽科教育の動向や学生の特性を踏まえた上で、さらに学習を深化させるには外国語科との連携が不可欠である。なぜなら、小学校音楽科教科用図書では、ミュージカル「サウンドオブミュージック」を通して、様々な歌声の表現やミュージカルの楽しさを味わう学習を行うが、この題材でとり上げられている楽曲は、「サウンドオブミュージック」「ドレミの歌」「ひとりぼっち

の羊かい」「わたしのお気に入り」「エーデルワイス」の5曲で、いずれも“英語の歌”を鑑賞することになっているからである。筆者は、専門的な声楽実技をイタリア歌曲やドイツ歌曲を通して学習してきたので、“英語の歌”の指導において発音指導が課題であった。

しかし、「教科教育法（英語）」との連携が可能となったことで、かねてから構想していた“聴取力”“音楽文化”に的を絞った鑑賞学習を試みることができた。この学習モデルの目的は、受講生が日常生活の中で自然に行っている「音を耳で聴き取る」という学習方法を意識化することによって聴取力を育成することと、音楽文化の受容力の醸造を目指すことである。

小学校音楽科教科用図書でとり上げられている“英語の歌”は、歌唱する際は、日本語歌詞の上に付記されているカタカナのルビを見ながら歌唱することが多い。「英語で歌ってみよう。ふりがなはめやすです。」⁷⁾としているが、カタカナに頼った歌唱では、その言語が持つ音質、語感、アクセント、リズムなどの音楽文化について感じとることが難しいといえる。そこで、NHKテレビ番組「課題授業ようこそ先輩」での綾戸智絵が母校の小学校で行ったジャズレッスンを参考³⁾に、“英語の歌”を何度も聴き、自分たちで聴き取った音をカタカナで表記して歌唱するという学習方法を取り入れた鑑賞分野の模擬授業を行うこととした。

まず、「教科教育法（英語）」の授業で、「ドレミの歌」、「エーデルワイス」のディクテーションを中心とした発音指導を依頼した。つぎに、「教科教育法（音楽）」での鑑賞分野の授業づくりに関する講義において、“聴取力”“音楽文化”に着目した鑑賞の学習を行う意図について説明し、その後、授業実践にとり組んだ。模擬授業については、各クラスで担当する3グループ（A、B、C）と別々に補講を行い授業づくりについて検討した。ここでは、授業づくりを行う中で、英語の歌詞を聴き取る活動は可能であるのか、またどのような方法であればとり組めるのかということが課題となり、グループごとに解決策を模索しつつ模擬授業を行った。

4. 模擬授業の考察

学校音楽科の学習活動において、このような学習活動経験のない学生にとって授業をイメージすることが難しい上に、“聴取力”“音楽文化”に着目した鑑賞学習を検討することは、授業者・学習者双方にとって、ややハードルが高かったといえる。模擬授業後の質問紙調査⁴⁾からも、「ドレミの歌（英語歌詞）」の英語の歌詞を覚える際、学生自身にとってCDから聴こえた音をカタカナで書き取る方法の難易度について質問したところ、「難しかった」「やや難しかった」と回答した学生が48名で約半数が難しかったと感じている。一方、普通・簡単と回答した学生が40名であっ

たことから、難易度については二極化していることがわかる。また、小学4年生がこの活動を行う場合の難易度については、「難しい」「やや難しい」と回答した学生が68名であった。さらに、このような活動を小学校でとり組んでみたいかとの質問には、音楽科でとり組みたいと回答した学生は58.2%、外国語科では81%であった。難易度は高いが“英語の歌”を活用した学習については、前向きに捉えていることがわかる。

「教科教育法（英語）」と「教科教育法（音楽）」とで連携した教科横断型の学習については、約7割の学生が一定の効果があったと回答している。

表5 活動の難易度について（学生自身）

難しかった	6
やや難しかった	32
普通	32
簡単	8
その他	0

表6 活動の難易度について（小学校4年生）

難しい	27
やや難しい	41
普通	9
簡単	1
その他	0

- ・学んだことをつなげて考えることができ、繰り返し学習するので良い
- ・幅広い知識を学ぶことができる(深く学べる)
- ・どちらの教科もとり組みやすくなる
- ・英語の授業で経験したことを音楽でとり組むので安心感がある
- ・両方の教科にメリットがある(どちらの授業でも役に立つ内容を学習できる)
- ・それぞれの教科の特性を比較しながら学べる
- ・大学の授業としては新しく面白い
- ・他の教科でも行ってみたい

外国語科と音楽科それぞれで学んだことを、学生自身が応用しながら学習したことは、従来の方法にとらわれない新たな学習モデルの体験のみならず、学生自身の学習を深めることができたといえる。その他、「音楽を用いての英語学習は良いが、音楽では必要性がない

のでは。」との回答があった。前述した、このような活動を小学校でとり組んでみたいかとの質問に対し、音楽科より外国語科でとり組んでみたいと回答した学生が20%以上も多かったこととも重ね合わせて考えると、「教科教育法（音楽）」では、「ドレミの歌（英語歌

詞)」の鑑賞・歌唱を糸口として，“聴取力” “音楽文化”に着目するという意図の理解が不
 充分であったこと、歌唱の学習時間が少なく、
 「ドレミの歌（英語歌詞）」の歌唱指導に自信
 を持ってとり組めるまで学習を深めることが

できなかったことが要因ではないかと考えら
 れる。また、実際にとり組むとなった場合、
 どのようなことを不安に思うのかという質問
 に対しても、下記のような回答があった。

- ・聴き取ることが難しい場合の対応 *12件
- ・できない子どもへの支援方法 *12件
- ・グループワークで意見が食い違った場合の対応 *7件
- ・自分自身の英語の発音に自信がない *6件
- ・カタカナでうまく発音を表記できない場合の対応 *5件
- ・本来の発音と異なってしまう場合対応 *3件

(*延べ数)

学生は、英語の発音聴取の難しさから派生
 する児童の反応への対応に不安を持っている
 ことがわかる。英語の発音聴取については、今
 回の模擬授業において、各グループ(A, B,
 C)で、児童がとり組みやすい聴取方法を検
 討した。その中で、Cグループの学生が1つ
 の方法を考案した。児童にとって「ドレミの
 歌（英語歌詞）」の1番の歌詞を全て聴き取る
 のは難しいと考え、クラスを8グループに分
 け、各グループ1フレーズずつ聴き取る方法
 をとり入れた。（「ドレミの歌」は、4小節で1
 フレーズ《ドはドーナツのド⁸⁾》の計8フレー
 ズ《32小節》の楽曲である。）つぎに、異な
 るフレーズを聴き取った8名を1グループと
 した新たなグループをつくり、聴き取ったフ
 レーズを互いに教え合うという活動を行なっ

た。この活動については、模擬授業の研究討
 議において、学習者役であった学生からとり
 組みやすかったとの感想を得ることができた。
 今年度は、Cグループが所属するクラスのみ
 での模擬授業だったので、次年度は、全ての
 クラスでこの方法を共有しつつ、さらなる児
 童の学習を支援する手立てについて検討した
 い。

その他、「英語が得意な子にとってカタカナ
 表記は難しいのでは」、「カタカナ英語はあま
 り使うべきではない」との意見も挙げられた。
 カタカナ英語で歌唱することについては、「ド
 レミの歌（英語歌詞）」に限らず、学校の音楽
 教育の課題として研究にとり組む必要があ
 る。

5. 授業の課題と今後の取り組み

「教科教育法（音楽）」の授業では、①“聴取力”“音楽文化”に着目した鑑賞学習を行う意図の理解不足と、②「ドレミの歌（英語歌詞）」の歌唱活動が不十分であったことによる実践力の育成不足が課題となった。そこで、この課題解決を目指し、履修学生は異なるが、「音楽科概論」（2年次後期）において、“聴取力”“音楽文化”に着目した鑑賞学習を行う意図の十分な説明、及び「日本語の歌」と「英語の歌」それぞれの言語文化によって「歌唱法」や「言語のリズム」等の相違に関する鑑賞・歌唱学習を行なった。また、今年度の模擬授業では、「ドレミの歌（英語歌詞）」または「エーデルワイス（英語歌詞）」のどちらかを選択して行うことにしていたが（全てのグループが「ドレミの歌」を選択した）、「ドレミの歌」に特化して取り組むこととした。なぜなら、学生にとって、「エーデルワイス」は、テンポがゆるやかで英語の歌詞や発音を聴取しやすいが、ドレミ体操を活用した「ドレミの歌（日本語歌詞）」の歌唱から「ドレミの歌（英語歌詞）」の鑑賞・歌唱へと展開していく流れの方が、本学教育学部の学生の特性に適していると考えからである。

テンポも速く発音の聴取についても難易度の高い「ドレミの歌（英語歌詞）」に取り組むことへの具体的手立てとしては、外国語科で発音をしっかり学ぶだけではなく、音楽科の

授業においても歌唱指導の強化が必要である。学生が「英語は英語だけどカタカナで書き取り日本語にしてカタカナで歌うのですが、授業が終わったら英語で歌っている様になるあの不思議さはとても面白かったです。」と述べるように、英語の歌詞で歌唱しやすいテンポから始め、暗唱できる（カタカナ英語が外れる）まで歌唱の学習を行いたい。

本授業実践では英語らしい発音で歌うことが主たる目的ではないが、模擬授業を通して、学生が歌唱指導に不安を持っていることが浮き彫りとなった。そこで、今後は、「音楽科概論」「教科教育法（音楽）」と連携しながら実践力と学習材研究の方法が身につく学習内容について検討したい。さらに、「外国語活動」「外国語科」教育の動向も踏まえながら、「音楽科概論」と「英語科概論」、「教科教育法（音楽）」と「教科教育法（英語）」の教科横断型の学習モデルの開発を行うことを今後の課題としたい。

V. 今後の課題

小学校教員養成課程における外国語科と音楽科には、“聴取力”、“英語と日本語の相違”に気づくという文化理解という点において関連性があり、“英語の歌”を取り上げることは、外国語（英語）科における視点としても教材研究の視点としても非常に重要となると言えるだろう。また、高橋・河合ら（2021）は、

英語科と音楽科との連携について、「音楽科において英語の歌の学習の位置付けが明確にされていないからこそ、英語科と音楽科のそれぞれで教科の特性に応じた位置付けをすることで補完し合える資質・能力がある」⁹⁾、と指摘しており、小学校での英語科と音楽科の連携指導における有用性が示唆されていると言える。

本報告での外国語科と音楽科で連携したパイロット研究の独自性は、共通する楽曲を各教科の特性を活かしながらとり組んだことにある。そのことによって、学生は教科の特性を比較しながら学習することができた。また、各教科における実践力についても向上したのではないかと考えられる。さらに、2教科の授業において“共通する楽曲”を繰り返し学習したことも、本学教育学部の学生の特性に適していたといえる。各教科の「概論」と「教科教育法」を通して、それぞれの教科に閉じた学習ではなく教科間の連携によりその枠組みを広げたことは、小学校教員養成における人材育成の一助となったのではないかと考える。

今後は、各教科での課題を基に、各教科での学生の学習状況、学習内容・方法、学習時期等を踏まえ、外国語科と音楽科で連携した新たな学習モデルを構築したい。

*本論は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴを吉田が、Ⅳを石塚が担当した。

註

(1)2021年度、2022年度の「音楽科概論」授業内調査（2021年10月1日実施・有効回答者数81名、2022年9月30日実施・有効回答者数68名）による。

(2)前掲(1)の調査による、小・中学校の音楽授業に関する調査結果。

	小学校の音楽 「好き」	小学校の音楽 「嫌い」	中学校の音楽 「好き」	中学校の音楽 「嫌い」
2021年度	60.3%	7.4%	38.2%	10.3%
2022年度	53.8%	13.7%	35%	16.2%

(3)NHK「課外授業 ようこそ先輩」制作グループ、KTC中央出版2000『綾戸智恵 ジャズレッスン』KTC中央出版における、“英語の歌”の聴取方法、歌唱指導を参考にした。

(4)2022年度「教科教育法（音楽）」（3年次前期）7月22日実施 有効回答者数78名

質問紙調査については、被験者に調査の目的、内容、方法等を口頭・資料にて説明した上で、協力の同意を得たもののみを用いた。また、研究発表に際しては、個人情報保護の上、データを用いることを伝えた。

引用文献

- 1) 文部科学省（平成30年）『小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説外国語活動・外国語編』株式会社東洋館出版 p.11
- 2) 前掲書1) p.26
- 3) 文部科学省（平成30年）『小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説音楽編』株式

- 会社東洋館出版社 p.6
- 4) 前掲書3) p.10
- 5) 今由佳里 2014「音楽鑑賞教育に関する基礎的研究」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』 vol.65 pp.49-54
- 6) 新実徳英他 2020『おんがくのおくりもの1』(平成31年検定済) 教育出版 pp.28-29
 新実徳英他 2020『音楽のおくりもの3』(平成31年検定済) 教育出版 pp.10-11
 新実徳英他 2020『音楽のおくりもの4』(平成31年検定済) 教育出版 pp.14-17
- 7) 新実徳英他 2020『音楽のおくりもの6』(平成31年検定済) 教育出版 p.44
- 8) 新実徳英他 2020『音楽のおくりもの3』(平成31年検定済) 教育出版 p.10
- 9) 高橋美由紀, 河合紳和, 澤田育子ら他 (2021). 外国語教育・音楽教育における「英語の歌」の指導—教科間の連携と「音韻構造」に焦点を当てて—. 教科開発学論集9 33-43, 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻 p.37
6. 参考文献
- イーオン (2019). 小学校の英語教育に関する教員意識調査2019 retrieved from https://www.aeonet.co.jp/company/information/newsrelease/pdf/aeon_190902.pdf (2022.10.8)
- 開隆堂 2020『Junior Sunshine 5』(令和2年度検定済)
- 開隆堂 2020『Junior Sunshine 6』(令和2年度検定済)
- 学校図書 2020『JUNIOR TOTAL ENGLISH 1』(令和2年度検定済)
- 学校図書 2020『JUNIOR TOTAL ENGLISH 2』(令和2年度検定済)
- 教育出版 2020『One World Smiles 5』(令和2年度検定済)
- 教育出版 2020『One World Smiles 6』(令和2年度検定済)
- 教育出版 2020『小学音楽 おんがくのおくりもの1 教師用指導書』 p.60-65
- 教育出版 2020『小学音楽 音楽のおくりもの3 教師用指導書』 p.38-42
- 教育出版 2020『小学音楽 音楽のおくりもの4 教師用指導書』 p.42-47
- 啓林館 2020『Blue Sky elementary 5』(令和2年度検定済)
- 啓林館 2020『Blue Sky elementary 6』(令和2年度検定済)
- 三省堂 2020『CROWN Jr. 5』(令和2年度検定済)
- 三省堂 2020『CROWN Jr. 6』(令和2年度検定済)
- 高橋美由紀, 河合紳和, 澤田育子ら他 (2021). 外国語教育・音楽教育における「英語の歌」の指導—教科間の連携と「音韻構造」に焦点を当てて—. 教科開発学論集9 33-43, 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻
- 東京書籍 2020『NEW HORIZON Elementary English Course 5』(令和2年度検定済)

東京書籍 2020 『NEW HORIZON Elementary English Course 6』 (令和2年度検定済)

光村図書 2020 『Here We Go! 5』 (令和2年度検定済)

光村図書 2020 『Here We Go! 6』 (令和2年度検定済)

文部科学省 2018 『小学校学習指導要領 (平成29年度告示) 解説外国語活動・外国語編』 株式会社東洋館出版社

文部科学省2019 外国語(英語)コアカリキュラム
retrieved from https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/04/04/1415122_3.pdf
(2022.9.8)

山内優佳 2017 小学校における外国語授業で活用できる楽曲の選定と指導法の提案—外国語リスニング研究の知見から—. 広島文化学園大学学芸学部紀要 7, 67-74, 2017

Krashen, S. 1982 Principles and practice in second language acquisition. London: Pergamon Press Inc.

NHK「課外授業 ようこそ先輩」制作グループ,
KTC 中央出版 2000 『綾戸智恵 ジャズレッスン』 KTC 中央出版